



關卷驚奇俠客傳
編三
壹

~ 13
3156
8



曲亭翁手輯

開卷驚奇

俠客傳第三集

歌川國貞畫

羣玉堂精刊



甲午孟陽
有像魁本

平想

俠客傳第三集引



今茲憂月本集亦脫稿是日得拓
本一張於澠華書賈羣玉堂閱是
楠廷尉正元朝臣所禱勇凶神官
尺書也左方有歌忠誠不朽華
如一日其幽緘且有華押不署宜

職姓名。即以丸山可澄氏。舉抑鼓
比技已。真蹟無疑者也。意楠廷尉
文忒兼備。而其諷詠。太平記及吉
聖拾遺所載。各纒一歌。與今所見
共為三歌。其它佳什。猶有惜泯滅
不傳。是書可謂崑山片玉矣。本集

多言楠氏車。因翻刻所得。拓本。以
荆人皆卷。四方君子。尚鑒焉。虛中
有實。知非遊戲。則拙編亦增充。
天保四年。暑月。己吉。燒樟拂蠶。題
于庭。學燈下。蕙笠。渙隱。

董齊盛義書



北山の金閣

仙觀の下

仙觀の下

北山の金閣

花宮の寝殿

茂堤

開卷驚奇俠客傳第三集總目錄

壹卷

第十回

姑摩姫苦學讀劍書
无上女通化現仙觀

第十一回

論順逆九六媛授復箭
踏香煙姑摩姫邁北山

第十二回

金閣女俠殪雙
葛城僊孃昇警

第十三回

禱考墓楠女擊殘仇
結碁局沙彌訟災祥

第十四回

滿家計遣羅轎
維盈囚免投石

叁

第十五回

正直受命送姑摩姫
彼岸二謬鬧八九莊

第十六回

縫殿自燒飛樓
安次送死會生

第十七回

山上千里鏡克關莊院
佛前本命録初知病妹

第十八回

隆光千速驅他賊
長總逆旅遭騙喝

第十九回

疑似孽小夜二殞命
瘞金計木綿張越牢

總目錄終

本集亦復起應永十一年秋八月盡十九年秋八月其第二十一回已上總目錄第一集第二集首卷

五右衛門の城

壬小夜の中山

十沖津の旅宿

⑧莊院の下

⑧八九の峠

⑦日〇の山



木綿張
荷二郎

物は世にふかき糸綿も
かたせく那みよの
楠平秋のそえ糸波女
賛楠正直 信三翁

楠式部少輔
正直

像管筆四



忠義義膽 女中丈夫 美而不艶
劍術豈麤 仙娘妙扶 野史心誅
奇才雖後 祖德何孤 勸懲啓懷
口碑罔朽 補天以石 缺陷創敷
賛楠姑摩姫 玄同散仙

赤松五郎則助
のりすけ

楠姑摩姫
こまの姫

像管筆一

仙傳三轉卷一

管領山管んれい
満家まんけ



孤忠薄命雖志不伸
天賜有後摧櫃得珉

贗隅屋維盈
頼齋野叟

關 圖

隅屋小郎隅んせう
維盈ゐん

像替第六

む糸乃史むいとのしと申まをふ
りりののねねののねねののねね
かかののねねののねねののねね
せせのの贗ゑ節せつ婦ふ縫ぬい殿でん 愚おろ山やま人びと

八奴はなは隸れいのの好こう友ゆう
彼岸ひがん



節婦縫殿
ふじさわ

像替第六

仙傳三轉卷一



女名安次

七

三十一



仙三轉卷一

三十一

時件の仙女童們的姑麻姫より對ひてを姫上東に母一宵夜よりと仙嬢の等
 寂ていまだ卒這方とひらけて一個の走りて奥に赴は一個の姑麻姫の先小立て馳て
 案内をまらけり。介程小姑麻姫の些も怯る氣色なく仙女童們的愛をまじりて
 舒揖讓と掖れり。内に入りて玉樹瑤草の種々る黄金成を磁石踏渡り
 とひら不眼映く伽羅と造り一歩廊の蕙蘭の室に入る状とど瑪瑙の柱瑤瑤床
 皆人間の東西るる奇麗壯觀画の如く目覚かるととる。倦る言向峯より
 と一も思ひかひるは樓閣の美を盡たる光景の夢欲現然然る也。ある仙嬢の神
 律也。奴家も信と増させんと。あの樓閣を幻とせぬをわづらふんぞん然らば這頭
 有る大履高樓へけり。とどむら奥に入る程の既の幾回後より過る南面は匾額
 あり。心もろく瞻仰れ。无上玄通仙觀と六金字と題した。前面は高座の正原和を
 累布を九六媛の其首小處の錦綉の色々るは袷龍の衣白やち。緑髮肩

よの背小無たは。その黒髪衣融りて神歎人歎と怪まる。高く捲せ珠簾を焼占
 たる香爐峯の雪。旭の照添ふは似たり。楓且たる綾帳の風靡靡。五采雲の城ふ
 花を降ふ如。既して九六媛の姑麻姫が仙童女小案内にせられ來りて。とどむ
 後方小侍り。又那一個の仙童女立事。とるぬさう立迎して招は寄せ。和を分ちて。備小坐
 ら。禁女ふや。背を極拍て善哉稀世の神童女誨。より小差小とる。仙書と観
 研究して。一檢及び。苦学賞するふあまのあり。最も愛を。めど。このれく姑
 麻姫遠く。和を極遣り。席を避て。とる思ひ子も。瘞られ。る。倒は心裡恥く。ほ
 る。る。那書と受。また。り。の。密。は。学。と。も。有。月。解。か。は。の。ヨ。の。向。ま。ら。る。と。ら。る。
 いふ。と。胸の。掖。敷。の。香。を。時。わ。と。逆。さ。る。今。宵。悄。々。地。不。燒。試。る。香。の。烟。不
 後。ひ。て。來。る。と。も。知。む。這。仙。觀。を。ま。ら。む。見。目。小。撰。り。る。飲。し。ゆ。の。方。法。は。詞。不。盡。一。目。易。ら
 せ。教。さ。せ。る。か。と。其。心。懷。ら。る。二。三。の。仙。童。女。を。令。出。せ。九。六。媛。を。受。令。と。ら。ち。も

用金書案並措之微笑。そその談の云か。疑され、學術進まを疑ふ故、邪路
 不も入ん。什麼疑ふ可とせん疑ざる可とせん心も向つて分明ある。壁に我這仙觀の
 深山似ける壯觀ると。和女郎の這え疑ひぬ。知事大履高樓も又柴門の白屋も
 只住む人の心あり。然に富貴を羨まると。足ると知り分守れば宮殿も高屋も異ある
 又又足ると。知事千席の室も坐まされぬ。萬萬席を羨めり。此是悟の久あつて凡
 夫の迷ひを醒まし。提徑あり。ゆれば神社佛閣華美を盡して。凡夫の信を増す。欲を
 我這仙觀樓閣も。壁言。辰虫氣海市の如し。実あるのあえり。あつて。則有り。あつと
 以へ則無し。これを命けて幻境と。又只這山の。るる。浮世の総て幻境。悟らぬ
 故。夢の中。遊び。く。も。五十年。夢。わ。り。と。誰。う。知。る。た。古。の。俗。質。朴。で。民。も
 り。之。貴。人。も。若。次。不。前。方。采。禄。不。斷。宮。室。と。卑。う。考。て。力。を。清。血。盡。した。那。唐。山
 也。聖。と。い。る。竟。馬。の。質。素。も。儉。也。も。及。び。我。神。風。の。伊。勢。山。田。る。天。照。白。天。神。の

大宮所を并そつて。浮世の人の神慮。北月。華美を好む。外物を飾り。驕れる故。不
 長久ある。子孫廢絶致すと。曉らん。抑亦悲し。か。富貴四海を有る。天皇。手。宣。示
 とも。御祖の神の神慮。差。て。驕奢の為。余民を旁ら。宮殿。美。之。盡。し。の。苗。害。理。と
 旋。も。も。快。く。建。武。の。壞。乱。即。是。之。况。世。之。遊。跡。を。埋。り。神。仙。と。成。り。佛。甚。其。薩。と。稱。へ。ら。れ
 久方の乾坤と。俱。長久ある。のが。暴。秦。阿。房。の。餘。材。を。討。め。身。を。九。層。の。樓。臺。に。坐。り。て
 樂。と。以。つ。て。何。ぞ。て。凡。夫。は。異。る。の。の。と。せん。然。る。に。仙。家。も。莫。不。の。の。紫。微。宮。殿。に。居。す。欲
 去。又。成。佛。と。願。ふ。の。の。天。堂。の。快。樂。と。欲。を。その。惑。ひ。甚。し。知。事。濁。世。と。厭。む。の。の。流。石。と
 枕。し。身。と。雲。水。に。儘。ま。る。の。の。絶。て。求。る。所。な。し。東。西。と。一。足。り。ら。る。と。み。世。は。知。ら。る。と。る
 けれ。人。不。求。め。る。と。も。あ。る。と。心。高。け。れ。危。く。身。の。低。け。れ。天。地。と。俱。升
 降。ま。を。名。つ。て。山。中。の。宰相。と。い。け。り。和。女。郎。の。義。を。論。さん。と。茲。仙。觀。に。現。せ。り
 先。よ。く。あ。れ。を。と。ひ。か。と。い。て。姑。摩。姫。詔。然。る。頭。を。拾。げ。ち。拜。て。有。加。を。も。て。奏。金。言

玉音面前、聞くこと、疑ひの雲霧、存かざる、旨取、丁寧な、議論、稱蒙、の感、
 ひ、釋、を、る、何、字、目、の、浅、く、と、修、行、足、ら、ぬ、今、速、く、必、ず、か、ら、ず、不、就、て、又、問、ま、る、ん、約、
 莫、学、問、の、要、領、の、發、明、と、し、專、務、と、し、經、書、の、種、々、の、信、し、く、後、に、疑、ふ、こと、の、疑、ふ、を、
 学、術、の、進、ま、り、と、考、へ、る、不、疑、の、何、ぞ、と、發、明、を、し、ら、ん、や、の、疑、ふ、を、教、の、か、り、と、
 い、へ、九、六、媛、點、頭、で、不、論、の、か、悟、り、の、師、の、教、を、待、ち、感、し、て、恥、て、悟、り、と、あり、耶、学、
 問、の、身、益、の、益、の、益、と、後、に、損、を、と、る、と、悟、道、と、の、存、け、り、然、世、の、與、人、の、與、小、教、訓、の、
 書、と、著、者、の、の、の、身、聖、人、に、な、れ、ば、瑕、疵、を、と、る、と、る、瑕、疵、の、故、小、学、の、の、稍、疑、ふ、く、
 の、非、と、知、り、孔子、の、送、書、老、佛、の、經、典、と、皆、聖、人、の、教、誨、を、瑕、疵、を、と、る、故、又、人、疑、ひ、を、尚、聖、
 人、を、疑、ひ、必、邪、路、を、入、ん、と、和、女、郎、六、の、美、を、と、る、と、わ、我、書、を、讀、む、不、至、誠、と、し、て、
 絶、く、疑、ふ、と、る、へ、今、面、前、に、指、示、ま、さ、し、終、に、劍、術、と、字、を、進、退、隨、意、と、る、人、の、然、と、
 け、の、香、と、焼、て、烟、と、御、道、不、做、ま、及、び、人、に、知、れ、傳、這、仙、家、往、還、自、由、と、る、人、を、懸、念、と、

勉、め、る、時、は、ゆ、つ、つ、と、失、ひ、易、く、い、ふ、は、是、を、復、し、會、ひ、快、く、い、ふ、を、喜、ぶ、備、
 仙、書、三、言、を、合、抗、て、卒、そ、そ、返、さ、ぬ、姑、麻、姫、を、受、收、め、飲、ひ、を、演、別、を、告、身、を、起、
 さ、ん、と、せ、七、程、の、仙、童、女、們、が、あ、る、ゆ、ゆ、と、香、爐、を、合、と、茶、を、女、仙、身、邊、に、差、寄、せ、九、六、媛、
 香、盒、を、香、一、撮、を、中、に、徐、に、熏、ら、せ、濃、煙、の、忽、地、に、雲、と、成、り、と、姑、麻、姫、を、
 せ、ら、窓、を、ら、し、て、白、飲、と、い、ふ、奇、を、故、姑、麻、姫、の、瞬、息、間、に、如、意、宝、珠、院、に、の、身、臥、居、
 還、り、し、知、り、の、絶、て、る、ゆ、ゆ、と、是、を、り、と、姑、麻、姫、の、仙、書、を、讀、む、と、初、に、似、せ、備、人、の、
 折、々、香、と、焼、て、身、を、淨、め、元、上、玄、通、神、仙、嬢、の、名、號、を、念、す、三、百、遍、許、恣、而、徐、に、
 以、て、文、義、を、討、ひ、奥、妙、を、探、り、不、智、と、疑、ふ、と、只、深、信、を、宗、と、し、て、学、ぶ、と、又、三、松、
 初、学、九、年、と、加、れ、ば、茲、に、三、松、及、び、六、学、術、進、む、自、得、と、至、る、所、を、年、歲、絶、
 十、歲、之、乳、臭、は、送、れ、る、童、女、を、れ、ど、の、賢、才、の、光、著、る、和、漢、の、国、秀、淑、女、也、傳、
 白、く、況、仙、術、と、り、下、り、身、の、輕、と、も、の、如、く、奔、走、升、降、意、の、隨、之、食、れ、る、饑、と、

かなを睡らざれども勞と知る。その奇その妙意表不出て、技を怪む可る。光と智と
 秘して色中に見る。こまければ伯母の尼前、隅屋夫婦の信あり。知らねる。姑摩
 姫の性、大人備て容止漸く、小美麗を月小擬へ、花の比ふ。信妙情多、祝髪黒
 衣の優婆塞、姨お倣て、浮世の花を散さん。西年歴さん、佳婿君と討索めて
 絶る楠氏と興さん。と維多羅殿のどけの、問話休煩、介程、姑摩姫の學術、既小
 奥義と極め、終つて、あつた師の仙嬢、小と報て、の終ひと、真さる。とどひ小
 けれど、その夜、艾悄悄、地臥房と起出、て口小咒文、唱れ、戸節の、呪敷、る、勿然、と、そ外
 面、出かけ、信、進退、を、ま、か、け、り、と、さ、い、う、又、唱、咒、文、と、俱、小、身、小、飛、鳥、の、ま、く、突
 然、足、の、地、踏、ま、瞬、息、回、小、葛、城、山、の、仙、觀、小、ま、ま、九、六、媛、を、召、近、着、る。
 その術と賞め、側、坐、り、て、別、後、の、安、否、と、問、る、及、登、時、面、個、の、仙、童、女、の、姑、摩、姫、を、茶、を
 看、め、浮、世、の、同、尉、め、て、管、待、初、小、弥、倍、け、り、少、選、と、姑、摩、姫、の、師、の、女、仙、小、う、ち、對

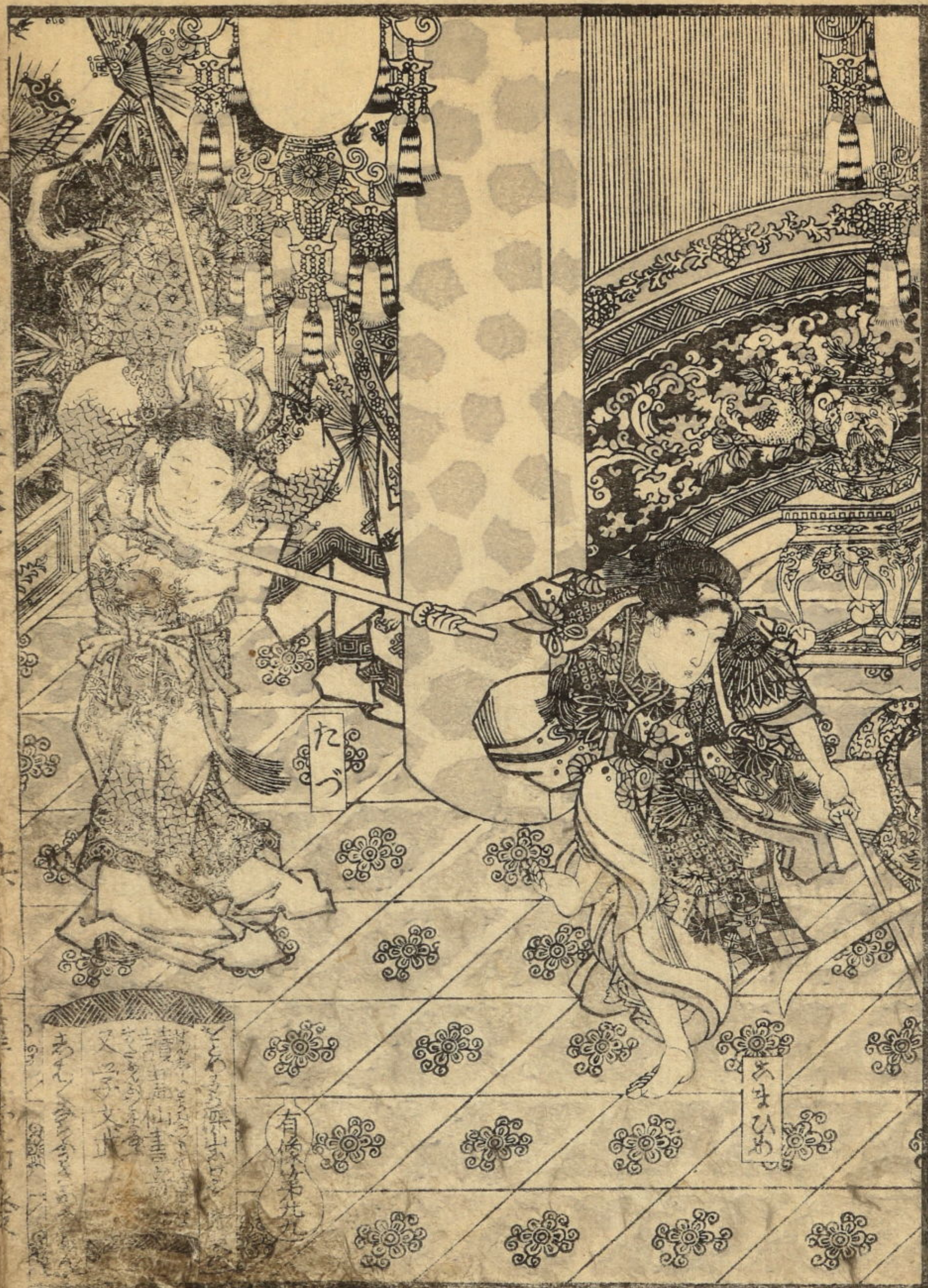
〇、其、論、を、の、口、訣、小、導、ひ、ま、う、り、智、と、袂、け、て、疑、義、既、小、く、學、ぶ、と、稍、年
 來、小、隨、小、術、成、就、の、時、至、り、ん、心、神、每、小、清、朗、老、身、の、輕、た、と、も、の、如、く、走、り、飛
 鳥、小、捷、れ、り、の、欬、ひ、を、真、さ、ん、と、初、て、術、を、試、し、果、を、走、神、速、也、地、と、踏、り、て
 來、り、ん、信、の、宿、念、障、り、多、く、雙、言、と、討、ひ、日、易、く、あ、べ、り、と、問、へ、九、六、媛、點、頭、て、然、入、仙、術
 成、熟、の、あ、れ、復、雙、言、の、受、心、安、ら、る、れ、も、時、を、至、り、今、よ、り、忍、寺、と、三、松、小、泊、り、宿、望、を
 遂、さ、り、素、仙、傳、の、劍、俠、の、御、向、の、ま、ま、く、示、せ、り、如、く、あ、ま、己、と、い、は、る、所、の、今、よ、り、夜、に、這
 の、ま、ま、の、術、成、就、も、る、も、の、文武、の、道、小、疎、く、も、あ、ら、る、所、の、今、よ、り、夜、に、這
 里、小、來、て、文、を、學、び、武、を、講、ぶ、後、小、用、の、こ、あ、ん、亦、這、義、を、懈、り、と、い、は、れ、て、姑、摩、姫
 怡、悦、小、勝、む、即、便、這、夜、を、初、と、夜、毎、々、小、あ、ら、る、儒、書、の、十、二、經、を、上、旨、と、志、す、文
 傳、小、法、り、暨、下、と、學、び、老、莊、関、尹、諸、子、百、家、の、書、兵、法、の、七、書、武、備、志、の、類、皆、悉、講、ぶ、
 聽、て、儒、學、も、既、小、疎、る、と、武、藝、の、唐、山、の、十、八、般、本、邦、の、鞍、馬、八、流、習、ぶ、と、の、所、を、

多敷の敵は、西個の仙童女と出され、原這西個の仙童女は、豆と吸れ知止端
 と呼れて、年十二の女も、俱九六媛は、仕と幾百年あるや、仙術を傳受て
 鐘離権が青龍の劍法をも、初め姑麻姫、他們不及、學ぶと稍久しう
 奏て、他們の及ぶるの、登時九六媛、教て、擊劍は、是士卒に、技を、大將の馬を
 能て陣法を宗と、下、遮莫、這擊劍の、只是士卒の、技を、大將の、學ぶ、近
 つ敵を拂ふと、か、只大刀も、人を研んと、欲せん、人も亦大刀も、必我を研ん
 と欲せん、這時、勝負不定、何を、敵を、勝ん、必技を、一心を、仇と、防に、心を
 敵と、征せ、必勝と、然、仙家、青龍劍の、真法、又、禪家、活人、殺人の
 劍法、の、仙佛、の方、異れ、敵を、死を、忘れ、一心、逆決定、と、自若と、これ、當
 ら、柔よく、剛と、征せ、その、理、即一致、這を、胸を、藏り、機を、臨みて、亂れ、敵を
 劍、既、足れ、馬、又、馬と、學ぶ、と、一、腕、二、枚の、紙を、折り、馬を、造りて、口、呪文を

唱れ、忽地、一箇の、白馬、作り、鞍も、鏡も、具足、庭の、庭の、登時、又九六
 媛、姑麻姫、の、教る、馬の、進退、の、細、敵の、細、破る、と、死、教者、の、杖、
 離る、異る、是、故、の、細、細、鐵、鋒、と、縫、藏、と、義、貞、記、の、識、され、大將、の、用
 心の、只、這、一條、の、千、軍、萬、馬、の、中、の、大將、騎、馬、の、修、煉、と、兼、走、る、と
 旋風、の、如、此、も、礙、滞、ある、と、敵、口、これを、擊、ち、馬、の、脚、研、と、克、の、箭、を
 射、中、も、中、ら、ぬ、の、と、又、新田、贈、中納言、の、軍記、の、識、着、られ、傳、れ、騎、馬、を、軍
 旅、の、緊、要、の、でも、ある、と、必、善、學、ぶ、と、論、し、是、夜、の、馬、術、を、教、え、又、次、の、夜、の
 的、を、楯、射、法、を、教、る、傳、れ、姑麻姫、開、甲、夜、々、宿、所、を、出、て、獨、仙、家、の、赴、け
 どの、竊、小、分身、の、法、を、設、て、臥、房、の、熟、睡、せ、と、形、貌、を、遺、た、れ、母、の、側、に、添、臥、ま
 る、姪、母、の、縫、殿、も、夢、不、た、然、と、あ、り、知、り、の、傳、而、光、陰、在、苜、又、三、三、年、
 歴、け、れ、姑麻姫、の、仙、書、を、得、て、又、く、と、夢、茲、の、五、稔、の、身、の、年、也、這、春、の、十二、歳、の、也

ろのけの時ふ永十五麻生這年の春京師入道相國源義満公主後小松天皇の北山
 山莊へ幸成しなると。正月の時候より這沙汰あり。現足利家の世成りて
 と麻生青人草の夫役小参るも多うけられ姑麻生姫の這風聲耳ひそ
 曇表初て神仙嬢と值遇せし折劍術の書と授けあひて今よりして學ぶと五稔
 至て仙術成就し六稔より復讐の志願を遂ると宣ひ小又只劍術の三つを御
 座よりて文學武藝も大々々々學び給ふ非除一稔を毎ともあれしと願ひ京へ
 本意を遂んと官の勇心のいをたれての夜仙家へ赴けしと旦と知止漏が邊へ
 出迎へて報さる我仙嬢の今朝未明の日の神の首の壽詞を奏しちりんと衣
 裳を更り雲駕を天宮へ赴けし折咱們的仰る我の久し天正姫娥列宿の
 見參るに這它外國の西王母太上老君名山の諸仙をも訪ふと累々任れかへ來ぬ
 る日の春の季より夏の季血然然と五六月の時候及ん姑麻生姫が又來るあれしと

報知て我かへ來りて日まて這里に往返せしを要す。宿所在をさるるを報て禁
 めると宣ひぬといふ姑麻生姫ちりて忽地望を失へとも却るべきありぬれ告別り宿
 所を還りて更し又來りて我師の飛舟自在を萬里の路もその具中より往還の事あり
 んは正月よりまで四五月までの遊歴ありぬるから我復讐を豫よりしめし年近つ
 ども足利の武威直盛るに仙術至妙の劍術も尚敷かたよりあふを今より如有
 いふも遊歴しりといひ誘へて對面を許しぬるありしを。尚ある人あり孰の年
 孰の時宿意を遂入悲しむるといふえの傳。苦の曾の火を鐘をて再あり
 たり。噫我々も愚痴るるを得かたき又も誠を盡し。疑はるる成道。豫られ
 たり。ゆへあふ漫の性起り。思高し師を疑ひし罪深かり元はせあり。いふ
 禱懺悔胸のむしりくも。明ぬ天の思寐の枕を推し烈女の才幹思。いふ
 志死あふ孫ども仇ありあり。師の女仙あり。今あふりるるあり。



頭て然之さ初はつ六む稔ねといひて天てん機きを洩さる與よりしとの実まこと今いま茲ここ亦またありし然しかばとて
 惴す々々としては稍さう復ふ雖も言いひし時ときのまれと左ひだり中なかつ右みぎのま人ひと力ちから大おほ敵たふを善
 順したが逆ひのま理ことわりとしては那な罪つみ戾とがを天のつ告つぐと余あ後のち子こを下さしてはくとのまらしまる傍かたわら小こ措さけ
 白しろ金かねのま香か爐いろのま香かとしては焼や熏くらしては貌かたちを改めて眼まなこを閉ては默もく然ぜんとしては半はん晌しやう許ゆる稍さう合あ當あ兵へい
 てと解とけてやよ登のぼ姑こ麻ま姫ひめ這こ方かたへは找たづねね御ご向むか南みなみ北きた兩りやう朝あさのま蝸かき角かくのま戦いくさは五十じゆ餘じゆ年ねん原はら是
 宿しゆく因いんあるとあると和わ女によ郎らうのま具ぐ子こ知しりしると飲のと向へは姑こ麻ま姫ひめ膝ひざを找めてその仰おほせでは結
 ともも奴やつ家かのま思おもひ足らぬば縁故ゆゑと考極ごくめはるともも尊うん氏しと直義ぎ
 らら特とく逆ぎやく奸けん詐さのま做しよまし所ところ世よのま人ひと通とほて知らぬあらうとのま九く六ろく媛ひめ嗟あは嘆たん
 るるがら那な内うち乱らんのま起おこ本ほんありし言こと長ながくも听きぬが昔むかし年ねん北きた條じやう貞せい時ときが奸計けいと最も惶
 白しろ皇こう統とうと三流りやうのま做しよまし天子てんしのま大おほ威い德とくを分ちまあらせしと揣でしよら大おほ覺かく寺じ殿でん
 と持明めい院いん殿でんと御子こ孫そん各おの々おの迭たが代たがのま皇こう位いのま即すなはちと奏そう一いつ定さだめまあらせし抑おさ大おほ覺かく

寺じ殿でんとまうらしまるる龜かめ山さん天てん皇こうのま御ご子こ孫そん然しかば龜山さん天てん皇こう脱だつ履りのま後のち嵯さ峨あるるける
 大おほ覺かく寺じ殿でんと仙居せんのま做しよましいふは是よりしての皇こう統とうを大覺かく寺じ殿でんと稱ましるる又また
 持ぢ明めい院いん殿でんとまうらしまるる後のち深ふか草くさ天てん皇こうのま皇こう統とう也なり中なかつ古こ後のち堀ほり川がは天てん皇こうのま外ぐわい祖そ持ぢ
 明めい院いん基き家か卿けいのま宅たくとしては仙せん居くのま做しよましいふは是よりしての皇こう統とうを大覺かく寺じ殿でんと稱ましるる又また
 後のち深ふか草くさのま皇こう統とうを持明めい院いん殿でんとまうらしまるる梅うめ松しょう論ろんを據るると後
 嵯さ峨あ天てん皇こうのま御ご讓じやう位いのま敕しやく詔みこと一いつのま御ご子こ孫そん久ひさ仁に親しん王わう院いん是なり御ご即すなはちと位いあるるべし
 脱だつ履りのま後のち白しろ河が法ぽう皇こうのま御ご送そう領りやうるる長なが講かう堂だう領りやう百ひやく八はち十じゆ箇こ所ところのま莊じやう園えんと御領りやう
 としては御ご子こ孫そん永えいく御即すなはちと位いのま王わうとしては死しのまりし也なり却かへ次つぎ々々後のち深ふか草くさのま御ご母ぼ弟てい恒こゝろ
 仁に親しん王わう是なり御ご即すなはちと位いあるる也なり御ご治ち世せい後のち々々御ご断だん絶ぜつあるる也なり御ご仔こ細さいあらふる也なり
 定さだめまあらせしるる龜かめ山さん天てん皇こうのま東とう宮きゆう後のち宇う院いん御ご即すなはちと位いあるる也なり後のち々々
 至いたるる也なり那な北きた條じやうが拒ましまる也なり後のち宇う院いん後のち深ふか草くさ兩りやう天てん皇こうのま御ご子こ孫そんとかつつくる也なり皇こう

位不即... 伏見... 後醍醐天皇... 北條高時... 東宮... 嵯峨天皇... 逆世... 後鳥羽... 泉下... 余程... と思食... 東宮...

りんと... 故... 後醍醐天皇... 離宮... 是より... 波羅... 萬餘騎... 高時... 掲焉...

安くして中興の君といわれ、天安の年に至りては、心傲りて好臣を登用し、艶妃
 楊太真を惑溺れて安祿山の虐乱あり。是より唐祚衰へて太平の目も稀なり。最も
 惶とて、初後醍醐天皇も徳を脩り政を親と善萬民の心をゆるく。武家條誅
 伐の叡慮と苦め、權威強暴四海を満る。北條高時入道より滅し、もまを盛
 徳の君より、運幸の後御より驕りて中納言藤房の諫言を容れず、賸奸詐
 第一の、高氏直義を愛めて功を過る恩賞の虎の翼を添ふるに似る。後思
 ひと思召れ、相模二郎時行を追討の折請不儘して征夷將軍のまをされ、初に
 叡慮不翹、約其衆の心、愆の唐の玄宗に似る。所を最惜り
 ける。當時の軍功と、初楠正成が、終るける隊兵より七千、劍破赤阪の
 城、小籠りより東軍凡八十萬、困を攻れ、も捷志、忠義の母を不官
 軍の眼と屬く。ち機を待り、勘と、介程、義貞、圓心、東西の義旗と揚て、勤

王の功、虎かき、これ由て論れ、功正成を第一とせ、次に新田義貞、鎌
 倉と討夷けて、その巢穴と拂ひ、から、と第二の功と、又その次に圓心、高氏六波
 羅と攻滅し、名和長年の船の上、山、佐々木清高と討走り、七皇居と守護し、甘
 了。舊都、不還幸る、も、せ、その功、這那甲、第三番と、做、死の、志、亦、不
 あり、高氏、世々、北條と、通家、之、官職、あり、所、領、も、多、り、あ、り、て、世、の、人、尊、敬、大
 加、る、所、の、り、けれ、帝、も、憑、心、く、思、食、は、高、氏、情、々、地、不、准、后、
 媚、く、屢、内、奏、を、経、り、く、その、功、大、く、過、る、三、位、不、叙、治、部、御、不、あ、り、是、の、刺
 死、諱、の、一、字、と、賜、り、て、尊、氏、と、召、れ、は、朝、恩、尤、洪、大、多、り、中、の、赤、松、圓、心、の、軍
 功、あれ、も、賞、む、む、む、あ、ら、その、子、律師、則、祐、大、塔、宮、不、仕、と、准、后、の、忌、せ、の、不、あ、り、
 執、成、し、ぬ、ひ、る、ゆ、佐、用、の、莊、の、賜、り、て、播、磨、の、守、護、と、召、放、され、圓、心、の、這、恨、を
 中、初、尊、氏、が、反、逆、の、折、を、賊、首、不、隨、從、那、惡、と、責、け、り、官、軍、他、の、斂、所、を

捕られ。戦ひ難義不及び。と勘く。これを以て圓心の初六波羅を攻めんと。その
 身の采利の做せし。朝廷のあん與のあふ。孟子の教。臣の臣と見づ。
 草芥のごとく。亦君とて。雙言敵の如く。素是故ある。君
 たる人を。敵るの。臣たるの。は。あふ。故に。孔安國の孝經の序。君の君たる。と
 との臣の。臣たる。と。あふ。圓心忠義の心。あふ。恩賞の功。當ら。と。
 時の不祥と。以て。做し。臣る道。盡す。采利の與。朝廷を恨。と。虎狼野心の本
 性。見。陡地。及。逆。荷。擔。と。尊氏が。股。肱。と。做り。行。狀。凡。彈。を。做。索。堪。ら。
 然。宋の儒者。朱熹の言。人。只。曹。操。が。漢。賊。る。を。知。れる。の。孫。權。も。亦。漢。賊
 る。と。知。ら。ざ。と。い。ひ。小。異。る。と。志。我。恐。り。後。々。を。南。帝。卿。子。孫。の。與。害。を。做。り。の。必。赤。松。が。當。黒。と。且。叛。逆。の。の。あ。ふ。圓。心。ま。か。の。如。く。又。尊。氏。の。奸。詐。と。い。つ。初
 高。時。の。催。促。の。從。ひ。り。名。護。屋。高。家。と。共。侶。伯。老。を。投。て。出。陣。の。折。高。時。小。疑

とて。誓。書。を。呈。し。その。子。と。質。と。却。六。波。羅。不。到。り。て。東。西。の。勝。負。を。揣。り。軍。馬。を
 篠。村。に。駐。め。て。動。き。高。家。陣。歿。と。す。て。猛。可。官。軍。に。從。ひ。ま。る。と。赤。松。圓。心。千
 種。忠。頭。們。と。共。侶。六。波。羅。を。攻。破。り。て。第一。の。功。を。思。ふ。介。後。鎌。倉。在。り。と。謀
 反。の。折。義。貞。節。度。使。と。奉。り。て。追。討。の。通。途。官。軍。屢。利。あり。と。す。て。尊。氏。慌。て
 頭。髮。を。剪。り。て。建。長。寺。に。入。り。内。心。真。實。逆。罪。を。怕。れ。不。あ。ふ。然。し。朝。恩。淺。く
 づ。り。介。後。死。ま。る。の。讒。者。の。所。為。也。是。已。と。思。ふ。と。世。の。人。小。以。ま。る。奸。計。小
 也。と。介。後。京。中。軍。敗。れ。筑。紫。を。投。て。走。り。折。鬪。戦。と。君。と。君。と。の。折。鬪。以。不
 る。と。介。後。伏。見。院。御。在。世。の。日。小。内。綱。院。宣。と。稟。賜。り。新。院。上。皇。も。亦。共。侶。と
 尊。氏。一。味。ま。せ。し。尊。氏。遂。に。光。嚴。帝。の。弟。光。明。帝。と。推。立。て。御。位。即。ま。る
 也。延。元。の。號。と。用。ひ。ま。る。尊。氏。の。奸。計。也。光。嚴。帝。高。時。が。り。ま。る。と。世。の。君
 介。後。尊。氏。重。祚。を。稟。薦。め。ま。る。弟。光。明。帝。御。位。即。ま。る。と。せ。し。ん。

廢立の功を以て已が隨意せんとするの故に後醍醐天皇の睿山は行幸し舊
 都の幽れ竟る吉野は皇居とて南北朝と分れぬは徳のければ尊氏此
 朝の成興に忠義を盡さんとす皇統は左まれば右まれば此風雲の會ふ衆と
 只我家と與えと逆伎倆しるれば南朝後村上天皇の正平六年冬十月尊氏直
 義不和ふより北京を勢ふるければ姑且危窮と避人為尊氏義詮父子詭之南朝へ
 降参せし折南朝の君臣もその機を猜しと勅免ある北朝の劍金と南朝へ渡り
 せしめて北王宗光帝と退げり。太上白美の號とせらる。その次の年正平七年春二
 月官軍の大將楠正儀北畠顯能千種顯經桂河より攻入り折足利義詮
 敗走りて美濃州へ逃る折持明院の三院を情るも棄措て御安危とて入ら
 ざること故に光嚴光明宗光の三院は南朝の人心をなすれぬ。加名生の別宮に幽せし
 介後尊氏義詮門詮議し。宗光院の母弟後光嚴院とありし出り。

御位小即まおせけり。これ由り親ると死の尊氏義詮が做を所北朝の忠ある中
 むぞ只國賊といわれぬ與に立まわらせり。君あれば君臣の名もあはる。萬機の政
 事の毫たりのも御あらし儘せぬ。是より王室卑うあ。風俗陵夷及び
 歎くものもあまのあり。在昔保元の内乱の新興上皇と後白河天皇と皇統は
 争ひ小支起り。君の弟兄臣も弟兄。頼朝武臣も亦父子兄弟。為義義朝
 磨の劍を削り。三綱乱る。國治らば亦復平治の逆乱あり。平清盛武功の
 獨兵權を執り。推て天子の外戚の做陸。殘忍悖逆せざる。み
 官家のわれとも无が如し。是時小當り。源頼朝義旗と伊豆配所は揚
 平家と西海討滅し。凱歌と京師の奏せし。後白河法皇睿感のあまの摠
 追捕使と授け。是より武家の敏急昌し。威と八荒の輝し。朝家をさす。御
 武断の憑らざるといふ。頼朝の兒子們亡びて。北條義時陪臣とす。國

命と執りて四方を威伏し、美久の乱起る所及び、後鳥羽土御門順徳の二皇子を
 孤嶋に遷し、まゝにして暴威を子孫に傳へり。介後伏見院のあん時、龜山法
 皇御隠謀あり、那北條を滅して、美久の御送恨を雪めさせんと思食けり。
 浅原八郎為頼父子が内裡に走り入りて自殺せしより、御隠謀の事世に傳へ
 る。當今伏見院に北條貞時が厚く管待せり。後嵯峨天皇の御送詔
 遵ひしを推して、皇位に即けさせしと、徳とて、と鎌倉報のいり、中の
 院、新院、後宇、をも六波羅へ遷し、まゝとせしと、つえしと、龜山法皇駭たのみ。
 一切知召さるると、折言の死消息さへ貞時が賜りければ、支又の忽劇に静り、あはれ
 又御四世と、麻芝後醍醐天皇御即位の初より、いへ高時を誅戮して、後鳥羽龜
 山両白皇の御送恨を雪めさせんとす。年來御隠謀頻り、より、東宮、北
 條高時が相謀で、立まらせしと、徳とて、と鎌倉告させ、高時竟滅

びて、又尊氏御心を寄めて、後醍醐帝と、苟且る、御父子の義あると、故思
 召れど、是より朝廷南北に立分れて、天の両大陽あるに似たり。那北條が悖逆を
 義時、三皇を、孤島に遷し、まゝとせし、も、月、積虐の惨酷に至り、又、那尊氏
 直義が、残忍なる、大塔宮、護良親王一の宮、尊良親王と、始なり、南朝、皇子皇
 孫、他們が、與、位、依、命、を、喪、ひ、り、その、事、軍、記、に、載、る、も、漏、る、も、な、ら、ず、
 又、只、南、朝、竹、園、の、金、枝、玉、垂、木、の、ま、る、も、北、朝、の、君、も、亦、閉、戦、難、美、及、ぶ、毎、小、尊、氏
 義詮、們、の、棄、れ、れ、或、敵、の、虜、と、り、或、近、江、の、山、里、小、竹、竹、竹、萬、機、の、政、事、を
 夢、ふ、も、知、召、さ、せ、も、南、朝、の、威、勢、武、家、の、及、べ、せ、の、も、政、の、朝、廷、も、
 出、る、の、劣、り、の、初、より、保、元、の、乱、原、を、思、召、る、後、嵯、峨、帝、の、送、詔、を、録、で、大
 覺、寺、殿、持、明、院、殿、御、執、着、の、御、私、欲、なく、高、時、誅、滅、の、時、當、り、て、御、合、體、
 ゆ、さ、非、除、尊、氏、猛、威、を、振、て、四、海、を、吞、ん、と、欲、さ、る、も、その、憑、心、の、所、あ、る、と、竟、自

滅小至るべし。此は是持明院殿の成行也。又醍醐天皇の御失策も三
 初北條高時を滅さんと思ひ口をせし比日御隠謀の趣とて中原章房の仰合
 さるるにありける。那章房の儒学の達人忠信正首なりければそのあるは
 悄悄地小諫なり。と他が口より洩れやせん。闇敷も敷きあけの天道を善
 福して福を福をその臣若罪あふ法度と明しして誅しあふ。章房素より罪
 あらざる。忠信の心のて諫言せし影護しとて竊敷敷きあけの絶て至尊に
 祈りあはる。小後笠着の戦ひ破れ六波羅維幽れぬ。折快々三種の神器成
 持明院殿へ渡りまわらせ。御讓位ありと謹言せし。云云といひて平
 記の載せし折神物神器進措の事。小後又尊氏小賺され。叡山より還幸し折
 慮中も似ぞ幽閉られて尊氏が需を拒む由る。豫造置たる三種の神器の贋
 物を持明院殿へ渡りあひけり。蓋三種の神器の御祖神の御送宝也。外邦比

類あると。然天日嗣知召を継體の君授受す。皇位も萬歳萬々歳
 傳させの事。至神至妙の灵宝と一時の權謀をいふ。その贋物と造りて逆徒を
 給ひあひけれ。尊氏も亦私に国位の君と造立と。那紫の采と奪ふ。南北冲敵の
 禍を致したる。よて此君。醍醐の外剛と内柔なり。初御隠謀の緯の趣録倉
 史に折御聖文を賜りて神は誓言て高時を怒と實あひ。那正志小龜山帝は御先蹤
 ありと。天子のまゝる。死す。然か。孔子のいへく。古の愚は直り。今此愚は詐
 る。匹夫匹婦も詐れ。これを笑ぬ。そと天子あり。伴りぬ。民馬を従ひ。徳
 故小孔子のいへく。晋の文公の諷て正。齊の桓公の正。まて諷ら。那桓文の五覇は
 隨一善諸侯を會盟して。周室と尊び。その功存一。似これ。葵丘踐土の二會は
 子でその甲乙と論せらる。詐りの正。その身正かりければ。今せされ。も行。その身
 正かり。され。令。ま。従。亦是孔子の教え。這君伴の成。僻。之。初。と

尋りければ一旦素懐の遂めたる始あり終る。幾程もくせり又乱して昔都還
 南支成りて刺刃く自王子達を賊徒の與に喪れる。憤り杖霧と做りて吉野の宮に
 隠れぬ。孫帝後龜山の義満に給れて御誓約の画餅する。御祖神の嫌せぬ
 後醍醐帝の死詐欺の志報る。平何せん最痛し。姑麻手姫歎
 息の涙と帝妻時推林示めて然す。具不知りか。治乱の顛末宏論塵主譚の
 うやゆらへ死那御告文の。當日相模入道。赤尾藤太郎左衛門利約。讀せ
 たり。心不偽處任天照臨見と遊されける條と讀る折。利約猛に眩死。血
 垂ければ讀果せしと退出。その日。喉下不悪瘡出て苦痛堪む。病悩七
 日。死ぬ。太平記。皇威然。灼然。後笠着の波落。合
 合。又尊氏直義。叛。後々。介。同へ九六媛微笑して。那事と記せ。皇威を神。欲。如右文を飾

平常樂記と檢する。那齋藤利行。正中二年五月七日死去。又高時。御
 告文を賜り。正中元年の。佐。御告文の。三稔。利行の
 死。誤り知る。但。太平記。尊氏の。文。就中保曆間記梅松論。記。足利氏。順逆の理。違。言
 現成敗。惑。人心。盡。書。信。書。不。如。孟。朝。の。い。ん。定。不。考。そ。ゆ
 る。と。の。不。姑。磨。姫。感。歎。去。て。それ。疑。以。解。け。ぬ。又。後。醍。醐。天。皇。外。剛。く。も。内。柔
 老。と。宣。い。せ。し。其。る。故。と。再。向。然。と。那。君。英。武。の。事。は。皆。と。お。ん。智。慧。の。缺。る
 所。の。そ。と。も。思。ひ。當。時。朝。廷。の。御。微。力。を。二。天。四。海。の。猛。威。を。振。ひ。高。時。を。誅。見
 と。思。食。立。の。管。量。は。患。甚。と。凌。せ。る。以。て。御。本。意。を。遂。め。り。中。主。の。よ。く。を。死。お。わ。す。を
 是。英。武。心。術。の。廣。大。多。し。と。考。れ。る。時。と。勢。を。知。召。ね。ば。昔。の。如。く。公。家。一。統。は。大
 御。世。に。做。ま。んと。士。庶。の。歎。を。え。る。と。考。へ。大。内。裡。を。造。營。せ。れ。文武。両。を。公。卿。を

のて嘗ての如く頼朝以来華家。肩を大り肘と張る。武士のわれらるる如く。
 京家の奴の倣ふ。似れが太平の世と喜ばざらん。乱を樂みの言る。介程は尊氏。友逆の
 旗を建より。采利を多武弁の毎水の低系就く。威尊氏を従ひて。朝家と物れ
 屑とせむ。はれが尊氏。武畧を長て。連帥の徳あるもの。只是時々の和とぬ
 たる。ふらりて。利運する。ぬの時の。も大志ある。の。那義時が頼朝。倣ふ。二呼ぶ。世界に
 武士の悉皆。皆左祖。せん。這勢。と思召れ。南朝。の。後々。軍旅の事。最疎る。
 仁宗の宮達。と。征夷將軍。倣ふ。一。且。文弱。る。公卿。生。上。達。部。と。新。田。楠。は。お
 立。て。と。大。將。を。さ。れ。か。も。北。畠。父子。弟。兄。と。護。良。親。王。と。除。て。是。を。の。ん。武。功
 由。も。要。緊。の。折。矢。狼。狽。と。足。縁。賣。る。の。古。諸。司。百。官。文。官。武。弁。の
 け。別。る。事。の。折。の。器。と。擇。て。任。を。任。ひ。と。今。も。古。轍。と。踏。き。と。時。と
 勢。と。知。召。れ。ぬ。船。の。刻。と。劍。と。求。る。お。惑。ひ。の。又。那。護。良。親。王。の。唐。代。太。宗。に

無流。元弘の武功。大なる。件の親王。東宮。不立。ま。お。せ。て。正。成。を。七。大
 將軍。ある。且。義。皇。を。副。將。軍。と。俱。し。尊。氏。を。討。つ。官。軍。の。軍。威。必。振。ふ。く。
 鎌倉。下。の。仇。を。借。る。の。不。酷。に。行。は。る。や。這。君。大。智。不。す。ゆ。さ
 軍。を。ね。て。鎌。倉。を。攻。入。り。折。帝。駭。に。怯。ひ。て。尊。氏。を。討。つ。大。將。を。さ。れ。則。他
 下。の。忠。義。の。武。臣。の。苦。戦。を。忘。れ。ぬ。と。忽。地。逆。臣。と。和。睦。あ。り。て。京。師。へ。還。來。ゆ
 帝。は。性。外。剛。く。ま。は。せ。る。内。柔。く。ま。は。せ。る。理。不。違。ふ。是。の。後。村。上。後。龜

山の時不至の兄背は足利直義父の悖り足利直冬主の叛は細川清
 氏桃井直常山名氏清大内義弘赤松則祐に至るまでその降参を勅免あつて
 大将不做一あり大なる御失策誰の非ぞ知るべ夫忠孝の國家の根本
 賞罰治乱の係の所忽諸ふまぐらんとて不孝の子不忠の臣の法曹借まを匹夫も
 容れず御方の参るが馬とて當時の詮議は既具で識と後世貽一ぬい入深
 高祖が利を惑て侯景を信用する行ふ似て歎ふ堪ら然て那黨の不孝
 不忠の癖をいひ南朝の皇威を借り野心を遂ぐ欲せ所以不孝時脚滯
 居小對して策前を護ら他們は虚実を知らぬ檢めて得るは南朝の聖運の
 長くゆりしゆれり又按考南朝後村上天皇正平の年號は唐山梁
 蕭正徳が偽年號と相同し梁書六・侯景傳を檢せしは曰十一月景蕭

正徳とて帝とく偽位儀賢堂即志む年と改て正平と初童謡正平
 言あり故小號と立てこれ小志とあり然れ正平の年號は先蹤是不祥な當時の
 儒臣これを知らず穿鑿金疎忽是非及む幸いし七十四年九月久末の事かとも
 南帝御三世及いせあは行心といふ然とて只君の非を算立て説短説長人の忠
 臣義士の素よりせ所ん君に君にばとのまも臣に臣の道を盡し臣にさあるべ
 らむ事と謀る人智あり事と做さ人力あり考れども成るとあつ成るとあつ成
 と不成天命人善悪心報るは似るも天定りて人勝り果せるも天定りて人
 癰瘡出来て五十四歳を鬼籍入りのぬを神箭射ら世の
 の又直義の鳩死せられ義詮并小基氏の歳と享年と長く義詮
 その弟鎌倉の基氏二十八歳を身故りたり子孫のいふ成盛るれも義詮の家



あまひめ

天竺山宮二日六

八

たぐ



青ねん十二年娘
劍俠希天朝

九六媛

りしせ

有家第三

伊豆の宮二日六

され、餘殃するといふが、方僅義満が世の方で、南北一統あるといふも、定は一統あり
ゆゑ、あゝ、那人權詐の癖を、いづれ、三種の神器と、合復さんと、夢をみる、いづれ、
給はるる、和順及び、いづれ、以後とも、世に又、乱れ、その内心を、規へ、空しく、
異る、舌口、是、衣冠の罪人、ある、那身、鐘る、時運、は、来、と、五十年、乱れる、世を、理
めたり、けれども、驕恣、ふ、と、礼節、は、疎、る、あ、と、と、その、身、三十七、歳の、時相、國、た、と、
請、稟、せ、し、平、清、盛、の、外、その、例、を、と、輒、く、勅、許、す、り、う、を、義、満、怒、罵、り、て、ま、
らん、せ、ん、ま、あ、り、公、家、の、御、領、を、送、る、抑、へ、我、身、を、な、し、國、王、を、做、昇、す、斯、波、細、川
畠、山、們、を、棋、家、清、花、を、做、ま、る、其、折、り、知、り、あ、と、と、頻、り、の、焦、燥、な、り、け、れ、朝、議
これ、は、避、易、し、て、勅、許、あ、り、と、夢、え、す、驕、慢、か、の、如、く、い、け、れ、ば、親、族、誼、第、母、を、
陽、の、麻、非、徒、と、も、陰、の、各、々、鬼、胎、と、抱、え、野、心、の、甚、く、を、鎌、倉、の、管、領
足、利、氏、満、の、子、満、兼、の、至、り、て、も、世、を、謀、ら、ん、と、思、ひ、か、も、短、命、の、と、事、成、さ、り、た、

され、や、ま、る、か、ら、う、い、は、さ、る、と、い、ふ、く、
然、ら、山、名、大、内、が、兵、乱、蕭、牆、の、内、より、起、り、危、う、と、討、滅、せ、り、幸、い、か、く、免、れ
たる、上、の、天、子、を、敬、い、ま、る、ま、下、の、子、持、と、不、和、し、て、三、郎、の、義、嗣、を、の、愛、
は、後、の、患、い、を、な、さ、さ、る、こ、の、口、一、家、の、の、る、ま、る、その、世、の、安、危、を、知、ら、れ、り、却、第、一、は、不
忠、不、義、の、我、大、皇、國、の、例、も、る、外、邦、の、臣、と、倡、へ、明、の、成、祖、の、冊、封、を、受、く、日、本、國、王、
封、せ、し、れ、と、一、期、の、栄、と、思、ひ、大、辟、無、狀、萬、死、の、當、り、這、它、の、不、義、の、刃、を、と、も
南、帝、と、給、は、ま、る、と、誓、言、の、背、く、一、條、と、明、の、冊、封、を、受、た、は、是、國、體、の、係、る
處、謙、然、と、し、て、饒、さ、る、ま、縦、宿、然、あ、る、ま、も、天、の、替、り、と、道、を、の、ひ、し、の、非、正
ま、へ、の、の、る、ま、況、や、君、父、の、雙、言、敵、と、く、年、來、和、女、郎、が、敷、き、ま、く、欲、ま、る、情、願、道
理、の、稱、い、し、り、我、辨、論、を、惜、ぎ、く、順、逆、の、理、を、解、諦、せ、り、劍、俠、の、美、を、示、さ、ん
與、へ、宿、望、成、就、へ、今、宵、の、先、よ、く、邪、念、を、祛、け、徐、に、准、備、を、せ、ま、り、と、言、
詳、論、さ、る、理、論、は、姑、摩、姫、奮、雄、十、倍、勇、心、と、推、鎮、め、理、非、明、辨、さ、る、

文々事々、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

先

自他の得失仇りとも他小理ありて我小理ありて賊を仇るるも義満に
 如しの罪と正さべしと宣するを劍俠の要領して侍るれば快北山赴きて二世の
 怨を雪めてん許さるるを只官小憚るる所其時と推禁めて寛家をも國家に
 大臣敷ふも必礼あり儀あり戎衣を更めて宜く弓箭を携ふべしと云ふ西個の
 仙女童子豆と知止端があらぬと奥よりと来る肱甲臑盾細鏢戰籠大刀
 七首草鞋も俱に姑摩姫の卒と薦む六種の戦服姑摩姫の恭しく受合ふる
 退治の身装して立現の九六媛の準備の弓箭を左右小合ふらあやくと姑摩
 姫も又召近着て這個弓箭前我贖ふれを和女郎のまゝせん就中這征箭前
 往る建武二年乙亥の冬十月逆臣足利尊氏が鎌倉に在りて謀る折箱根
 竹下武敏所著官軍と柱人與服の上挿の尖箭前是則他が本心猿鼻は鷹
 見と朝廷よりと亦乃たりける吉の初の東西れば和女郎今亦這箭前よりと

孫義満と射く侍は是返矢の故実の稱ん太古十劍振神の御代の高皇産産
 灵尊より天稚彦を賜り天鹿見弓天羽々矢の天稚彦その弓矢をりて无名
 雉と射て斃すはその矢雉の胸を洞達し高皇産産火尊の御座ま面前より
 達するける高皇産産火尊を御覽する小鍔小鮮血塗まきよりよめてその矢を會
 めひく還一擲ちめひく過む天稚彦の胸前小鬘熟と中く仰反倒れく
 死ふけり是より世の人返矢を怕むとの縁故神代紀小見まきより世は是は流
 季子泪おといとも今も足利尊氏が官軍と射る征矢を返しと孫城
 射く侍るる會も易さ天の眞罰あらは優劣東西ありや六十餘年た
 昔より新田楠兩家の子孫の縁あはりの小授んとも未だを察し蔵
 措たは我さ素懐を遂たはるる卒々といひるが處與ま弓箭前を姑摩
 姫の受合ふらち戴はく莞尔と笑く小脇引着送は方ち死論し



殊更このまゝの這恩このまゝの呪のまゝのハのまゝの沁のまゝのカのまゝのリのまゝのケのまゝのハのまゝの怨のまゝの復のまゝの一のまゝの矢のまゝの天のまゝののまゝの羽のまゝの々のまゝの矢のまゝの由のまゝの外のまゝのるのまゝのハのまゝの神のまゝののまゝの眞のまゝの助のまゝの
 と師のまゝののまゝの御のまゝの庇のまゝの中のまゝの宿のまゝの意のまゝのをのまゝの果のまゝのさのまゝのるのまゝの瞬のまゝのくのまゝの間のまゝの程のまゝのをのまゝのかのまゝのりのまゝのまのまゝのりのまゝのとのまゝの店のまゝのでのまゝの立のまゝのてのまゝの九のまゝの
 六のまゝの媛のまゝのハのまゝの亦のまゝの復のまゝの靈のまゝの妻のまゝの時のまゝのとのまゝの推のまゝの禁のまゝのめのまゝのるのまゝの京のまゝののまゝの北のまゝのるのまゝの義のまゝの滿のまゝののまゝの金のまゝの閣のまゝのすのまゝのるのまゝの遥のまゝの々のまゝの初のまゝのてのまゝの
 白のまゝのくのまゝの旅のまゝのるのまゝの所のまゝの小のまゝの飛のまゝのひのまゝののまゝの術のまゝのとのまゝの沁のまゝのりのまゝのとのまゝのものまゝの指のまゝの南のまゝのあのまゝのるのまゝの雲のまゝの迷のまゝのやのまゝのせのまゝの入のまゝの然のまゝのハのまゝの亦のまゝの這のまゝの香のまゝの凡のまゝの煙のまゝのをのまゝの
 路のまゝののまゝの道のまゝの守のまゝの引のまゝのまのまゝのせのまゝのよのまゝの那のまゝの里のまゝの小のまゝの到のまゝのりのまゝのとのまゝの雙のまゝの言のまゝの小のまゝの遇のまゝのりのまゝの名のまゝの告のまゝの被のまゝのくのまゝの射のまゝのくのまゝの小のまゝの身のまゝの小のまゝの傷のまゝの
 着のまゝのせのまゝの五のまゝの臟のまゝのとのまゝの破のまゝのりのまゝのぬのまゝの劍のまゝの術のまゝののまゝの妙のまゝの其のまゝの首のまゝの小のまゝの在のまゝのりのまゝのそのまゝののまゝの折のまゝの人のまゝのとのまゝの知のまゝのさのまゝのものまゝのあのまゝのれのまゝの速のまゝの小のまゝのまのまゝのるのまゝの
 還のまゝの途のまゝのをのまゝの佳のまゝのとのまゝのまのまゝのしのまゝの這のまゝの上のまゝの旨のまゝのをのまゝの忘のまゝのるのまゝのとのまゝの誨のまゝのくのまゝの更のまゝの小のまゝの燒のまゝのとのまゝの白のまゝのはのまゝの香のまゝののまゝの煙のまゝののまゝのちのまゝの靡のまゝのくのまゝの
 方のまゝのをのまゝの御のまゝの導のまゝのすのまゝの小のまゝの姑のまゝの摩のまゝの姫のまゝのとのまゝの告のまゝの別のまゝのくのまゝの飲のまゝのみのまゝのをのまゝの演のまゝのはのまゝの暇のまゝのものまゝの百のまゝの夏のまゝののまゝの日のまゝののまゝの暮のまゝの春のまゝの夜のまゝの程のまゝの小のまゝのとのまゝの
 身のまゝのをのまゝの跳のまゝのらのまゝのしのまゝのとのまゝの忽のまゝの地のまゝの又のまゝのとのまゝのさのまゝのるのまゝのりのまゝの小のまゝのけのまゝののまゝの畢のまゝの竟のまゝの這のまゝの日のまゝの姑のまゝの摩のまゝの姫のまゝのとのまゝの金のまゝの閣のまゝの小のまゝの赴のまゝのきのまゝのとのまゝの君のまゝの
 父のまゝののまゝの怨のまゝのをのまゝの復のまゝのまのまゝのさのまゝのるのまゝの不のまゝの否のまゝのやのまゝのとのまゝのそのまゝののまゝの次のまゝののまゝの卷のまゝの小のまゝの解のまゝの分のまゝのはのまゝのをのまゝの聽のまゝの絲のまゝのかのまゝのしのまゝの。
 用のまゝの卷のまゝの驚のまゝの馬のまゝの奇のまゝの俠のまゝの客のまゝの傳のまゝの第のまゝの三のまゝの集のまゝの卷のまゝの之のまゝの一のまゝの終のまゝの。
 平のまゝの惣のまゝの

平惣

